

---

# 魔法少女リリカルなのは ～大魔導師の望む未来～

ルフアイト

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは ～大魔導師の望む未来～

### 【Nコード】

N5323L

### 【作者名】

ルファイト

### 【あらすじ】

かつて大魔導師と呼ばれた女性は虚数空間に落ちていくなか一人娘との約束を思い出す。

本当に……私はいつも気づくのが遅過ぎる

そんな彼女が願ったのはもう一人の娘の幸せ

その時石は輝き彼女はその場所から消えていった

## プロローグ 幸せを願って（前書き）

ベースは劇場版ですが一部TV版のとも混ぜてますがこれはわざとです。

## プロローグ 幸せを願って

あの日娘と交わした約束

私、妹が欲しい！家で一人ぼっちじゃなくなるしお姉ちゃんになりたい！！

今までどうして忘れていたのか……

本当は分かっていたのだ

失った命は決して戻らない

今なら分かる

あの子も私の娘であつたと

例えば私がお腹を痛めた子ではなくともあの理論で私が生み出したあの子”もまた私の娘だった”

遠ざかるあの子の涙を浮かべた顔が目に映る

心が痛む

今まで甘えさせることなくただ鞭を打ってきた自分になお娘である  
と言いつ切ったあの子

「本当に……私はいつだって気づくのが遅過ぎる」

ならせめてあの子の罪が少しでも軽くなるようにするのが私の最初で最後のあの子の母親としてしてあげる……いいえしなければならぬこと

「フェイト……幸せにおなりなさい」

もうはるか遠くの景色となった場所から黒い執務官の坊やとアルフ、そして白い魔導師の少女がフェイトを連れて脱出していくのを見届け傍らにあるジュエルシードに願う

「どうか フェイト あの子の未来が幸せでありますように」

その瞬間私 プレシア・テストロッサは9個のジュエルシードと共に消えていった

## プロローグ 幸せを願って（後書き）

ルファイト「というわけで始めました」

プレシア「ちょっといいかしら？」

ルファイト「んっ？」

プレシア「なんで私なのかしら？」

ルファイト「実は劇場版のあなたを見ていつか書きたいと思っていたのがあなたのハッピーエンドストーリー。約束を思い出したあなたが幸せになる物語を書きたかった」

プレシア「……でも今更私に母親なんて」

ルファイト「まあまあ始める前から諦めてたらだめだな。せっかく気づいて認められたんならこれからの物語で変えていけばいい」

プレシア「……………」

ルファイト「とりあえず今回はこの辺で。駄作ながら感想とか下さると幸いです。では次の話でお会いしましょう」

## 第一話 過去の時間（前書き）

禁指定するほどではないと思いますがちょっとだけ描写があります  
このくらいはセーフかアウトか意見くださると基準になりますので  
よろしくお願いします

## 第一話 過去の時間

ア

シア！

閉じていた目をゆっくりとプレシアは開く

「やっと起きたねプレシア。」

「えっ……あ、あなたどうして……」

プレシアの目の前にいたのは彼女が愛しもう亡くしたはずの夫の姿だった

「何言ってるんだいプレシア。ここは僕達の家なんだ。居て当たり前だろ？」

金髪に赤い瞳とライトパープルのオッドアイで彼はプレシアを見つめる

「それとも……まだ”したい”のかい？」

そこでプレシアは初めて自身が一糸纏わずかけられたシーツだけを羽織っていることに気づく

「っ！馬鹿っ！ー！」

枕を掴み彼に投げつけると彼は笑いながら部屋を出て行った

それから改めて自身の体を見る

「若返ってる……それにこの家は……」

スタンドにある写真を見れば彼との結婚式での写真が飾られていた  
そして先ほどの状況と自身の体の状態からプレシアは結論を出す

「初夜の翌日よね……もしかしなくてもジュエルシードかしら？」

体に違和感を感じモジモジしながら考えていく

「あの時私が願ったのはフェイトの幸せ……なのにどうして過去に  
……」

ふと脳裏に浮かんだ想い

「過去……やり直せる……私自身の手で……フェイトを幸せにする  
……でも”フェイト”であって”フェイト”じゃない……」

それはプレシアにとって甘美で魅力あふれる夢であり理想  
だがそれを手にするのをプレシアは恐れた

「フェイトを生み出してあの様だった私では”フェイト”に愛を注  
げない……」

聞いたことないだろうか？

幼少期に受けた虐待を親になったとき自分の子供にそれを行う親の  
話を

プレシアが恐れるのはアリシアと別人として生まれたフェイトを人

形と称し虐待したようにこれから生まれてくるだろうフェイトを”  
フェイト”と思えず虐待してしまうこと

「……………私はどうすればいいの」

窓から差し込む光とは裏腹にプレシアの心は暗く曇っていた

## 第一話 過去の時間（後書き）

ルファイト「というわけで過去に跳びました」

プレシア「ひとついいかしら？」

ルファイト「どうぞ」

プレシア「どうして私の夫に名前がないのかしら？」

ルファイト「原作にでてないのもありますが……実は彼にはある目標を基づいて書いています」

プレシア「目標？」

ルファイト「名無しである事が悔やまれる良い役の無名人物」

プレシア「あなたの文章力でできるのかしら？」

ルファイト「……精進します」

プレシア「そろそろ時間ね」

ルファイト「ではまた次回」

## 第二話 困惑と救いと急転(前書き)

プレシアさんにチートが入ります  
詳しくは本編にて

## 第二話 困惑と救いと急転

悩みを抱えながら過ぎ行く日々

プレシアは夫である彼にどうしても言えなかった

（未来から来たなんて言えないわ……）

未来の結末

自身が辿った道

やり直せると分かっているながらその一步を踏み出すことがどうしてもできなかった

そんなジレンマを抱えたまま迎えたある日

家事をしていたプレシア

不意に気持ち悪くなり皿を落としてしまう

それだけではなくシンクにそのまま吐き出してしまう

「こ、これってまさか……」

恐る恐る病院に電話しその日のうちに診察を受けたプレシア  
そして告げられたのは彼女にとって嬉しくもあり怖いこと

「おめでと〜ございます。」

「嘘……」

「まだ分かりませんが恐らく双子がもしれませんね。」

新たな命がプレシアの中に宿っていた

家に帰ったプレシア

自室の椅子に座り窓から見える自然を見つめながらお腹をさすっている

「双子か……これも私が望んだフェイトの幸せを形にしたの？」

プレシアが魔力を開放する

すると彼女の体から浮かぶリンカーコアとそれを護るように浮かぶ九つの結晶

「まさかジュエルシードをリンカーコアが融合してたなんてね……」

プレシア自身の特殊な技能、魔力媒体からの供給を受け自身の魔力へと転用する技能

それが架け橋となりリンカーコアを繋ぎ変質し実質10ものリンカーコアを得たに等しい

そして恐ろしいのはそれらが乗算式に出力を上げているということ  
並みの魔導師なら魔力のオーバーロードで死んでいるだろうがプレシアは先述した技能から察する通り魔力運用に関してかなりの技術を持つ

故に死ぬことなく大魔力を運用しコントロールしている彼女のランクはもはや計り知れないのだ

「そんな私から生まれる子供達が果たして普通に生きられるのかしら……」

ロストロギアを宿した者の出産例など一切ない  
プレシアの不安は増すばかりだった

その夜

彼に妊娠のことを話すと大喜びする

「よくやったよプレシア！しかも双子かもしれないなんて！」

ぎゅっと抱きしめられプレシアは思わず泣いてしまう

「プレシア？」

「ごめんなさい……このままでいさせて。」

抱きしめられ彼の胸に顔を押し当てようやく落ち着いたプレシアは  
決意する

「あなたに話さなきゃいけないことがあるの」

真摯にただ見つめプレシアは告げた

「私ね……未来の記憶をもってるのよ」

話すのはかつて（この時間軸では未来だが）起こしたこと

一人娘の死

違法研究に手を染めたこと

生まれたクローンを虐待したこと

虚数空間に落ちる際その子の幸せを願いここに戻ってしまったこと

全てを話したプレシアはただ目を閉じ彼の言葉を待っていた

「辛かったねプレシア。君が何かに悩んでるのは気づいてたけども  
ういいんだよ。」

抱き寄せられたプレシアはそのまま委ねる

「ちゃんと君は犯した罪を悔いてるんだ……生まれくる子供達を  
ちゃんと幸せにできる。夫である僕が保障する。」

その言葉でプレシアは救われる

そしてこの日を境にプレシアは本来の優しくアリシアを失う前の自  
分を取り戻していった

そして時が過ぎプレシアは女の子の双子を産んだ

僅かに先に産まれた元気活発な姉                   アリシア・テストロッサ  
優しく純粹で綺麗な心を持った妹                   フェイト・テストロッサ

忙しくも楽しい日々

母として娘二人にたくさんの愛情を込めて接し二人の笑顔を見て彼  
と笑いあう

ミッドチルダ北西々部クルメア地方に旅行へ行つた際に懐かれた山  
猫を結局連れ帰りアリシアとフェイトがリニスと名づけた時はプレ  
シアも笑うしかなかった

そのリニスがアリシアとフェイトが4歳になった時に死んでしまっ  
た時プレシアは躊躇うことなく自身の使い魔にした

今の彼女には溢れんばかりの魔力がある故に維持魔力など負担にも

ならない

娘達の悲しい顔を見たくないために行ったこの行為に彼は呆れながらもプレシアを褒めていた

この時アリシアにもリンカーコアがあると分かりショックを受けるプレシアだったがその日の夜、彼に慰められていた

それから半年後

自宅で使い魔にしたリニスと共にアリシアとフェイトに基礎魔法理論を教えていた時悲しい知らせが届いた

テストロッサさんがお亡くなりになりました

手にしていたデバイスが床に落ちる音だけが静かに響いていた

## 第二話 困惑と救いと急転（後書き）

ルファイト「第二話でした」

プレシア「後半どうにかならなかったの？」

ルファイト「正直なところこれ以上長くしてダレるのが怖かったの  
で多少強引ながら進めて行くことにしました」

プレシア「そして私のリンカーコアが凄いことになったわね」

ルファイト「やり過ぎたと思ってる。しかし私は謝らない」

プレシア「……」

ルファイト「ぶっちゃけると無印のKY登場回をプレシアママン無  
双にする予定なのでどうせならチートしちゃえと」

プレシア「……まあいいわ」

ルファイト「ではこの辺で次回お会いしましょう。因みに次回最後  
の家族が登場予定です」

### 第三話 彼の残した者と管理局の歪み（前書き）

こつから管理局などにアンチ要素や捏造設定が入ります  
人によっては受け入れられないかもしれませんが

気分を害した場合はブラウザバックをお願いします

### 第三話 彼の残した者と管理局の歪み

葬儀は静かに行われた

彼の葬儀には多くの者が集まった

しかしプレシアはその多くに不快感を持っていた

(どんなに言葉を繕ってもアリシアやフェイトを見る目は誤魔化せないわ)

遺体のない棺

フェイトに抱きつき泣いているアリシアと姉の肩を抱きしめ涙を流すフェイト

(リニス)

(分かっていますプレシア。この子達に近づく局員は全て丁重にお帰り頂きましたから)

そう

管理局の一部の局員はアリシアとフェイトの潜在能力に気づいたのか葬儀の場というのに勧誘しようとしていた

それに気づいたプレシアはリニスに二人の側にいるように頼み一人葬儀を進めようやく終わって戻ってきたのである

「失礼、プレシア女史少しよろしいか？」

振り返ったプレシア

そこにいたのは地上本部の重鎮の一人

プレシアがいた未来の記憶でも有名な地上の守護者と言われている彼

「レジアス・ゲイズ准将……」

この頃准将でありながら既にカリスマを備えているプレシアが認めている数少ない人物であった

「この度は管理局に責任がある……本当に申し訳ない。せめてもの詫びとしてこれを受け取って貰えないか？」

差し出されたのは封筒

このミッドチルダにしてはかなり珍しいものだ

「いえ……このようなものは」

「頼む。せめてものの誠意として」

そう言いながらプレシアに握らせる

(中にあるディスクにテストロツサ君が残した遺言がある……早くミッドから離れたまえ)

(それはどういう?)

尋ねる前にレジアスは離れ去って行ってしまった

プレシアの手に残された封筒だけが彼の来訪を真実と残していた

その日の夜

プレシアは一人ディスクを起動させた

『プレシア、親友であるレジアスに渡したコレを君が見ているという事は僕はきつと死んだのだろうね』

画面に映る彼の姿

他愛のない話から娘達の成長を見れないことを残念がる彼がそこにいた

そして最後に彼はとんでもないことを言った

『最後に……僕達の大切な娘の遺伝子が盗まれたんだ。僕はそれを調べた結果ある研究施設に辿り着いた。それがここ』

場所のデータが映される

『プロジェクトF……フェイトの遺伝子から人工魔導師をつくり人手不足を補おうとしたらしい。その唯一の成功例がここにいるみたい』

映された少女は髪の色こそ水色で先に行くほど濃くなっているが紛れもなくその少女はフェイトだった

『僕はこれからオルセアに行かなきゃいけない。もしかしたら管理局に消されるかもしれない。そうなったら君がこの子を救ってあげて。そしてもう一つ。恨むなどは言わないけど決して君自身がアリシア達からいなくなるような事はしないで。僕が願うのは君達の幸せなんだからね』

画面の外から彼を呼ぶ声が入る

『それじゃあもう行くよ。愛してるよプレシア……』

画面が消える

同時に映像に出た施設の場所のデータが映る

「リニス、ちょっと出かけてくるわ」

「はいお気をつけて」

プレシアの手にはリニスが作成したプレシア専用のデバイス  
”形なき杖” フェイスメイカーが握られていた

とある研究施設

今そこは阿鼻叫喚の地獄絵図と化していた

「答えなさい」

一人の研究員に音叉状の穂先を持つ槍で首を挟んでいる女性が問う

「プロジェクトF唯一の成功体、フェイト・テストロッサのクロー  
ンはどこにいる？」

そう問いかけた瞬間研究員の目が奥のドアを見る  
それに気づいた女性 プレシアはにっこり微笑む

「ありがとう。そしてさようなら。地獄に落ちて死んでいった他の  
娘達に詫びてきなさい」

音叉状の穂先が閉じ首を挟み切る

プレシアにとってこの研究施設で生まれた実験体は全て娘のような

もの  
ましてフェイトと同じ顔をしたものが失敗作という理由で処分されていた

「もつとも私に怒る権利は本来ならないのよね……でも」  
扉を開ける

「それでも……彼に頼まれた以上妻として、愛した夫の最後の願いは叶えたいのよ」

目の前にいる少女が浮かぶポッドを操作  
中から出してやるとプレシアは着ていたコートをかける

《マスター》

プレシアのデバイスであるフェイスメイカーが喋った

《この研究施設の資金援助……管理局です》

「でしょうね。彼のデータ通りか……この子を連れて帰ったらミッドから脱出ね。その前にこの子のデータは抹消つと……」

少女を抱きかかえるとプレシアは転送魔法を展開し去っていった

それから10分後レジアスの親友率いる部隊が研究施設へ踏み込んでいった

そこから得たデータからある少将が逮捕される

その少将は海側であり海は地上への借りを作る

この件を利用しレジアスは後に地上のエース部隊とされる首都防空

隊を設立することになるがプレシアにとってどうでもいい事であった

少女を連れて帰ってきたプレシアはリニスに少女を預け彼と過ごした家を住む場所探しているというb偶然知り合ったパプティズム夫妻に譲った

そしてプレシアはアリシアとフェイトを連れかつてプレシアにとっては懐かしいもの 時の庭園を動かしミッドチルダから離脱していった

時の庭園の玉座に座りながら移動先を考えていたプレシア

「私が関わっていないにも関わらずプロジェクトFが完成していた……この様子だとあの事件も何らかの形で起こるわね」

モニターに映る庭園の中庭

そこでアリシアとフェイト、水色の髪にライトパープルの瞳の少女  
フェリシア・テストロツサが離脱寸前にフェイトが保護した赤い狼 アルフと遊んでいる

「行くしかないわね……第97管理外世界”地球”へ」

時の庭園は静かに地球へと向かっていった

### 第三話 彼の残した者と管理局の歪み（後書き）

ルファイト「というわけでミッド脱出です」

フェイト「……むちゃくちゃだね」

ルファイト「言わないで……ってプレシアさんは？」

アリシア「航路設定中だから留守！」

フェリシア「だから僕達が来たんだ！どうだ！えらいだろう！！」

ルファイト「おお偉い偉い。でプレシアさんのデバイス”形なき杖”フェイスメイカーだが形状は基本的に自在に変わるが普段は劇場版プレシアさんの杖だと思ってくれればいい」

フェイト「槍になってたのはなんでなの？」

ルファイト「そこがプレシア専用の由来。前回の話に出てきたけどプレシアさんのリンカーコアはジュエルシードによって乗算式で出力が上がってるので普通のデバイスだと一撃でお釈迦になる。そこでリニスが”いっそデバイスのコアだけにしてフレームなど無くし全てをプレシアの魔力で形成することで戦略性と戦術性も上がるのでは”と思い至り大成功したのがフェイスメイカー」

アリシア「フェイトはバルディッシュがあるとして私をフェリシアはデバイスどうなるの？」

ルファイト「フェリシアは当然アレになる。アリシアはなのは側に

いる予定の男性オリキャラが御神流予定だから一緒に弟子入りで小太刀の予定」

アリシア「神速！？神速出来ちゃうの！？」

ルファイト「ぶっちゃけるとテスタロッサ家と高町家はかなりブレイクすると思う」

????「それでいいのか作者？」

????「仕方ないでしょう……もともどこか割を喰う面子もいるのでしょうか」

????「????君も????もそういうこと言っちゃだめなの!!」

ルファイト「なぞの人物が出たところでは次回」

意見ください

1、なのはの幼馴染にあたる男性オリキャラ彼のハーレムはありかなしか？

無しだと恐らく????の一人とくつつきます

2、闇の書

この時点で目覚めての入り混じったものにするかしないかはやて達の出演時期が変わります

3、アリサすずかの魔法少女化はありかなしか？

どうするかまよっています

ご意見待っています

第二話の夫である彼のオッドアイカラーが変更されました

**第四話 高町家とのお付き合い 前編（前書き）**

はい無印までの地球編が始まります

そして前回の????三人が登場します

#### 第四話 高町家とのお付き合い 前編

第97管理外世界”地球”

かつてのプレシアにとって終着点であり今のプレシアにとって始まりの場所となる星

”フェイト”を送り込みロストロギア”ジュエルシード”を回収させ”アリシア”蘇生の為にアルハザードへの扉を開こうとした記憶が蘇る

「今思えば私はこの星を滅ぼす所だったのね」

青い星の映るモニターを見ながら呟く

「……過去を思い出すのはおしまいね」

時の庭園を次元空間に隠す

念入りにプロテクトをかけ直し管理局などの次元航空艦に見つからぬようリーダージャミングを展開し全機能を維持できるギリギリまで落とした

「それじゃあ行きましょう」

使い魔のリニス、大切な三人の娘アリシア、フェイト、フェリシア、フェイトの使い魔アルフ

皆が待つ庭園の入り口へとプレシアは歩を進めた

この市に住み始めて半年  
プレシアは困っていた

「困ったわね……しばらくは彼が残してくれた遺産で何とかなるけどまさか職探しにここまで手間取るなんて」

プレシア・テストロッサ

大魔導師と賞されその身に特殊なリンカーコアを宿そうとこの地球においては何の役にも立たない

「プレシアらしからぬミスですね」

隣を歩くりニスは苦笑している

因みに彼女の耳は帽子で隠していた

「笑い事じゃないわよりニス。彼の遺産を出発前に貴金属に換金してなかったら今頃身売りしてるの……あなたよ」

リニスの笑みが凍りつきギギギと聞こえそうな動作でプレシアを見た

「ジョウダンハヤメテクダサイぷれしあ」

「お、落ち着きなさいリニス。そんなこと絶対させないから！ねっ  
！」

涙目になりながら虚ろな瞳になりつつあるリニスを慌てて落ち着かせるプレシアであった

時同じ頃

とある公園でテストロツサ三姉妹は遊んでいた  
近くには大型犬（実際は狼だが）に扮したアルフが三人をいつでも  
守れるように控えている

「よし行くぞ！喰らえフェイ姉！電刃衝！」

手にしたボールを投げるフェリシア  
それを難なく受け止めたフェイトだがアリシアがフェリシアの頭を  
叩く

「こらフェリシア！魔法は使ったら駄目ってリニスに言われてるで  
しょー！リニスに言うからねー！」

「や、やだやだ！それだけはやだ！シア姉謝るからリニスにだけに  
は言わないでー！！！」

アリシアに縋りつくフェリシア  
それを見たフェイトはおずおずと声をかける

「姉さん、私は大丈夫だしフェリシアも反省してるから許してあげ  
て」

「ごめんねフェイ姉……」

しゅんと落ち込んだフェリシアをよしよしと撫でるフェイト

「あつ……」

その時三人以外の声が公園に響いた

そこにいたのは亜麻色の髪をピヨコンと結ったツインテールの紫色の瞳の少女

こげ茶色に近いかショートヘアにライトブルーの瞳の少女

その二人に挟まれ腕を無理やり組まされている一房だけ三つ編みにした亜麻色の髪に青紫の瞳の少年

「先客がいたようですよ兄様、姉様」

ショートヘアの少女が二人を見る

その時には既に亜麻色の髪の少女がボールを持つフェイトの元に走りよっている

「な、なに？」

恥ずかしさからか少し声が上ずるフェイト

「一緒に皆で遊ぼうよ！私なのは！高町なのは！！」

亜麻色の髪の少女　高町なのはがフェイトの手を取る

「あ、ええっと……フェイト、フェイト・テストロッサです」

するとその経緯を見守っていたアリシアとフェリシアもなのはの手をとる

「フェイトとフェリシアのお姉ちゃんのアリシア・テストロッサだよー！」

「一番下のフェリシア・テストロッサだ！！」

そこにこげ茶色に近いかショートヘアの少女と一房だけ三つ編みにした少年も手を重ねる

「高町なたねです。三人で一番下になります」

「高町なずな。一応一番上の兄でなのは双子……かな？」

「にゃー！なんでそこで疑問系なのー！！」

そこにこげ茶色に近いかショートヘアの少女 高町なたね

一房だけ三つ編みにした少年 高町なずな

二人の自己紹介を聞いたなのはが重ねていた手を解き手をぶんぶんさせる

それを見ていたなのは以外の五人は笑っていた

第四話 高町家とのお付き合い 前編（後書き）

ルファイト「初の前編です」

フェイト「そしてなのは達との出会いです」

なのは「明記されていないけど時期はいつなの？」

ルファイト「土郎さんが退院してきた直後くらいかな。つまり翠屋暗黒期がまだ続いている状態」

なずな「あつ、でも原作とは違い私となたねがいる為なのは良い子の仮面を被ってません」

なたね「反面私達への依存が強めです。そして本編内であったように原作よりも素直で無邪気になっています」

ルファイト「……そういう風に見えてたらいいんだけど」

なたね「後私達高町兄妹はこうなっています」

長男 恭也

長女 美由希

次男 なずな

次女 なのは

三女 なたね

ルファイト「となっております」

フェリシア「ちょっと質問なんでけどいいかな？」

ルファイト「んっ？」

フェリシア「前回意見聞いて男性オリキャラハーレム云々聞いてたけど……このままだとなのはとなたねって」

ルファイト「はい！後編でお会いしましょう！！！！」

アリシア「逃げた！？」

第五話 高町家とのお付き合い 中編（前書き）

今回少々内容が桃子さん（翠屋暗黒期）への批判があります  
気分を害す可能性がありますので嫌な方は回れ右を推奨します

第五話 高町家とのお付き合い 中編

喫茶店翠屋

その店の前にプレシアとリニスがいる

「ちょっと休憩しましょう」

「そうですね……あれ？」

リニスが何かに気づく

「プレシア、あれアリシア達では？」

「えっ？」

言われてその方向を見る

「あ、お母さん！」

「母さん！」

「あの人がアリシアちゃんとフェイトちゃんのお母さんなんだ」

アルフの背に跨るフェイトとアリシアとなのは

「プレシアママ！」

「しかしアルフって犬には見えないよな」

「気にしたら負けかと思えます。なずな兄様」

その横をフェリシアとなずな、なたねが歩いてきている  
それを見ていたプレシアは思わず首をひねった

（あのアルフがあの子達以外を背に乗せるなんて……ってあの子！  
あの時フェイトと決闘した白い魔導師じゃない！！）

なのはを見たプレシアは記憶からなのはのことを思い出す

（これも何かの縁かしらね……見たところすっかり仲良くなったみたいだしよかったわ）

フェイトとなのはを見つめ思わず微笑む

「あの……フェイトちゃんのお母さん」

「プレシアよ」

話しかけてきたなのはに頭を撫でながら答える

「あっ……」

「……？」

驚くなのはに思わず首を傾げるがその疑問は横に居た彼が答えた

「すみません。なのはの兄なずなといいます。申し訳ないですけど  
そのまま撫でてあげてくれませんか？」

「妹のなたねです。なのは姉様はいつも家族の前では無理に笑って迷惑をかけないようにするので甘えるということを知らないのです」  
頭を撫でていたプレシア  
そのままなのは抱っこするように抱えるとそのまま自分の胸に顔を押し当てさせる

「そう……良い子ね。でもそんな風に子供が大人に遠慮なんかしなくてもいいの。思い切り甘えるのも子供の仕事なのよ」

「えっぐ……ふええええええん！」

愛しむようになのは抱きかかえ頭を撫でているプレシア  
その胸に顔を押し当て今まで我慢していたのが堰を切ったかのように泣き出すのは

「……なずなさん。あなたのご両親に会わせて頂けないかしら？」

「いいですよ。この店、母さんが開いてる店でここに皆いますから  
そう言っって一行は店に入る

「申し訳ありませんが……大型犬は飲食店なので遠慮してもらえませんかでしょうか？」

困った顔で告げたなたね  
それを聞いたアルフは店の玄関横で丸くなる

（一応私も居ましょうかアルフ？）

（大丈夫さ。リニスはフェイト達についてやってくれよ。プレシアのやつやらかすだろうし）

そんな念話のやりとりがあったがプレシアには関係のないことだった

今翠屋店内は非常に重たい空気を放っていた

貸切状態にしボックス席で向かい合う二人の母親

一人はもちろんプレシア

もう一人は高町桃子

なのは、なずな、なたねの母親である

「まずははじめまして。今日そちらのお子様と友達になった娘達の母、プレシア・テストアロッサです」

「は、はじめまして。なのはとなずな、なたねの母高町桃子といいます」

「母親とは甘え盛りの子供を放置する者を指しませんよ」

スパッと斬るプレシア

店の奥からなにやら殺気を感じたが無視する

「何やら事情があるみたいですが関心はしませんね」

「……言い訳ですが聞いてもらえますか？」

そう前置きし桃子は語る

現在なのは達の父である高町士郎が仕事で重傷を負い意識不明で入院中であること

この翠屋はまだ開店して日が浅くもっとも忙しい時期であること

そのためどうしてもなのは達に構う時間がなくなって家に留守番をお願いしていること

長男である高町恭也が無理な鍛錬を繰り返し彼もまたなのは達に構っている事がなくなっていること

それらを聞いたプレシアは半ば呆れていた

「桃子さん。まずあなたは勘違いしているわ。まだ幼い子供達にとつて一番大切なのは両親と一緒にいることが大事なのよ。確かになのはちゃん達にできる事はありませんがそれでもこのお店の中で一緒に過ごす事はできるでしょう？」

「それは……」

「あんなに良い子達なのにこれじゃああの子達は不幸になるわ……アレを見て」

プレシアが指差した先には店の前でアルフに乗るなのはとフェイトだがなのはが落ちる

それを見てアリシアとフェリシアが大笑いし慌ててなたねがなのはをおんぶしリニスの元に行く

リニスと共になたねがなのはの膝を消毒し絆創膏を貼っている

心配したなのはの姉で長女 高町美由希がなのはに声をかけると花のような笑顔を見せるなのは

「あんなにも元気にしている子供達を見た事あるかしら？」

「……私達は間違っていたんですね。どんなに忙しくてもきちんとなの子達と向き合い話をするべきだったのね」

背もたれに寄りかかり息を吐く桃子

一泊置くと深々と頭を下げた

「ありがとうございますプレシアさん」

「私こそ強く言い過ぎたわ」

ふとプレシアは思いつく

いや覚悟を決めたとも言おうか……

「桃子さん、魔法って信じるかしら？」

第五話 高町家とのお付き合い 中編（後書き）

ルファイト「はい中編です」

プレシア「思ったより長くなりそうだからここで斬ったのね」

ルファイト「プレシアさん漢字違う違う」

プレシア「フェリシアは私をプレシアママと呼ぶのね……あれ？前  
回呼んだときと違わないかしら？」

ルファイト「確認してない！違ってたら読んだ人が教えてくれるS  
A！！」

プレシア「ダビデスマツシャー！！」

ルファイト（こんがり風味）「では次回！」

プレシア「ここである質問がきたので紹介するわ。八神はやて（っ  
てだれかしら？）のことでけど彼女には現時点で一人だけ家族が一  
緒らしいわ。無印（ってなにかしら？）突入前に一応出す予定らし  
いわよ」

????「そういつ訳だ。しばらく待つことだな」

????「あかんで????。見知らん人にすぐ威圧的な態度取ったら  
あかんって言うてるやろ」

「……」しるせー！」のくらのほづが姉上を護るのにちゅんづい  
いだからって撞つて撞つて”今のは撞つてぞー”

「……」ほほしそつていじつとやったんか。お姉ちゃんは嬉しいで

「……」しるせー！」のくらのほづが姉上を護るのにちゅんづい

第六話 高町家とのお付き合い 後編(前書き)

アンチ管理局表現あります

というか個人的に慢性的な人手不足の組織ならこれくらいのことや  
つてる気がします

第六話 高町家とのお付き合い 後編

深夜の夜

静まり返った病院の一室

そのベッドに眠る一人の男性

彼の名前は高町士郎

高町桃子の夫でありなのは達の父である

その彼が眠るベッドの横に紫色の光が集まっていく

「転移成功ね」

「改めて見せてもらうと本当に驚きですね」

現れたのはプレシアと桃子だった

話は昼まで戻る

魔法

そんな単語を突きつけられ桃子は首をかしげる

「魔法ですか……?」

「ええ。人が空を飛んだり炎を出したり雷を撃ちだしたり……傷を治したりするあの魔法よ」

そう言ってプレシアは指に魔力を集める

紫色の光が集まる光景に啞然とする桃子

「はい」

指先を桃子に向けると魔力は桃子に入り込む

「えっ……肩の痛みが……」

「疲れが溜まっていたみたいだから治して差し上げました。これで信じてくれますか？」

「こう見せられたら信じるしかないです」

そっとプレシアはささやく

「あなたの夫……私が魔法で治してあげるわ。その代わり子供達をちゃんと見てあげて。親に無視される事が何よりも子供には辛い事なの」

そう言ったプレシアの脳裏には”フェイト”の姿が浮かんでいた

そして今に至る

そっと士郎に手をかざすプレシア  
治療魔法をかけること五分

桃子に振り替えたプレシアは告げる

「治したわ。でもできるだけ自然に治ったように見せかける為に強いのはかけられないの。ごめんなさい」

「いいえ！夫が助かるならそれだけでいいんです」

見るからに顔色が良くなった士郎

その頬を撫でる桃子

「あなた……待ってますからね」

そっと口づけをする

それを見届けたプレシアは再び轉移し桃子と共に帰っていく

それから五日

士郎が目を覚まし退院した

それを電話から知ったプレシアは再びフェイト達を連れて翠屋へと来ていた

「この度は本当にありがとうございました」

「いえ。私の勝手にやった事ですのでお気になさらず」

士郎と桃子、プレシアといった親に美由紀や恭也、リニスのみならず  
なずな、なのは、なたねにアリシア、フェイト、フェリシアとアル  
フもいる

因みになぜか恭也はぼろぼろであった

どうやら退院した士郎さん直々に説教という名目でしごかれたらしい

「プレシアさん、良かったら翠屋で働きませんか？」

「以前職を探していたと仰ってたので……どうです？」

士郎と桃子の申し出にプレシアは驚いていた

「……よろしいのですか？」

「あなたには私の家内のみならず家族の問題も解決してくださった。これでも足りないくらいです」

士郎の言葉に戸惑うが職を探していたのも確かにある  
これも何かの縁

そう思いリニスに視線を向ければ頷いていた

「それじゃあお言葉にお言葉に甘えさせていただきます」

頭を下げるプレシア

顔を上げた彼女の前には笑顔の高町夫妻

「それでは今後もよろしくお願いします」

そう言った士郎

「そう、ですね……なら私達の家族の秘密も打ち明けるべきですね。  
アルフ」

「あいよ」

すると狼だったアルフが人型になる

「わっ！恭ちゃん犬が人になった！！」

「アルフさんって人間だったの!？」

美由紀となのはが驚く

声には出してないがなずなやなたねも驚いているようだ

「あたしは狼の姿のほうが本当の姿さ。でもリニスの家事手伝いするならこっちじゃないと駄目なんだよ」

「私達はみんな魔法が使えるんですよ。桃子さんには話しましたが」

そう告げてなのはとなたね、なずなの三人を見るプレシア

「この子達も大きな魔力を持っているのね。管理局の連中が知ったら間違いなく誘ってくるわ」

「管理局?」

士郎の言葉にプレシアは答える

「時空管理局。幾多の次元世界をまとめる治安維持司法組織ね。私達のような魔導師と呼ばれる存在を重んじ次元世界の平和を護っているわ」

そう語るプレシアの眉に皺がよる

「何か嫌な思い出でも?」

「……私達が地球に来るきっかけになった事よ」

プレシアは夫の死、フェリシアの秘密といった事情を全て話す

「大きな組織には闇が付き物だがこれは酷いな。魔導素質さえあれば子供さえも戦場に出し自ら禁じた違法に手を出すとは」

「それだけではありませんよ」

士郎のぼやきにリニスが付け加えた

「この世界でもありませんでしたか？突然子供がいなくなったりする誘拐事件。魔導素質の高い管理外世界の子供は人手不足の管理局にとつてはとも都合がいい存在。管理世界の住人であったアリシアやフェイトを葬儀の場で誘うような人がいる組織です。何を言いたいのか……お分かりでしょう？」

「そして……士郎さん桃子さん。あなた達の子供達三人は素質で言えばフェイトたちとほぼ同レベルの魔導素質を持っているわ」

プレシアはそう言ってなのはの頭を撫でる

「特になのはちゃんが高過ぎて体の神経に影響が出るくらいよ。幸い無意識に制御してるけどきちんと教えないと危険なことには変わりないわ」

「………お願ひできますかプレシアさん？」

「もちろんよ。アリシア達と一緒に教えるつもりでした。私が魔法を話したのはこのためでも合ったんですよ」

こうしてテストロッサ家と高町家の付き合いは始まった

第六話 高町家とのお付き合い 後編（後書き）

ルファイト「後編でした」

なのは「アンチ！」

なたね「アンチですね」

ルファイト「でも前書きでも書いたけど慢性的な人手不足ならこれくらいしてそうな気がする」

なのは「確か原作では慢性的な人手不足とは言ってたの」

ルファイト「あとA S事件での猫姉妹の行動」

なたね「というと？」

ルファイト「エタコフィで覚醒したはやてを氷漬けにし封印する。これ自体は非道だけど確かに組織としてはありな考えなんだよ。無論クロノが言ってた封印後のこと云々は置いておくよ。でもはやてが地球暮らしである、闇の書の覚醒の仕方からみて猫姉妹は最後ヴオルケنزを目の前で蒐集して絶望させて覚醒させる。そして海でのエタコフィは威力から周囲にもかなり被害が出る広域魔法と判断するところ疑問」

なのは「？」

ルファイト「なぜ地球で覚醒させる？猫姉妹ははやてを屋上に転移させたことやいきなり現れクロノを蹴り飛ばしたりと転送魔法に関

しては恐らく登場人物で上手いはず。なら覚醒前に気絶させ無人世界に連れていくことも可能だろう？原作ではなのはが誘導したから海での決戦だったし」

なたね「それで？」

ルフアイト「もし誘導してなかったらあのエタコフィを陸に放つ。つまり”管理外世界に暮らす人たちごと凍らせて封印”する。結果だって覚醒闇の書封印したら解けるだろうから直撃する」

なのは「あっ！」

ルフアイト「しかもグレラムのみならずクロノはアルカンシエルを嫌な顔しながらも放つ提案をしている。だから私は”管理局は管理外世界をどう扱ってもなんともしわない”人もいる組織だと思ってる」

なたね「なるほど」

ルフアイト「あくまで個人的な考察だけだね。では次回！」

## 第七話 才能（前書き）

なのはの運動オンチの原因は公式ではありません

あとあくまで再構成なので公式時間軸とでき事がずれたりしてます  
気に入らない人はリターン推奨です

## 第七話 才能

テスタロツサ家と高町家が交流を始めて一年ほどたった  
プレシアは高町家の隣に暮らすことにし引越しを決めた  
(この時偶然にもお隣さんが引越していたのでこれ幸いと駆け込  
んできた)

無論これには理由がある

元々ミッドに居た時から教えてきたアリシア、フェイト、フェリシ  
アは魔力制御がしっかりとでき各々少しずつ射撃魔法や飛行魔法な  
どを習得してきた

なずなは元々最大量あまり高くないためか一度教えるとすぐに制  
御できるようになった

なたねはプレシアが首にかけているペンダントに気づき調べるとデ  
バイスであった事が判明

インテリジェントタイプらしくなたねの魔力制御を勝手に制御して  
いた

なぜデバイスを持っていたのか？

それは後々語る事にしよう

問題はなのはであった

高過ぎる魔力は神経を蝕み運動オンチになりかけていた

これはプレシアが庭園からストレージデバイスを引っ張り出し制御  
系を重点的に教えていったので改善の見込みが出ており今では人並  
みの運動神経は得ている

しかしこの改善で今度は違う問題が浮き彫りになった

「……なのはちゃんの才能にはほんと驚かされるわ」

「同感です」

練習場としてテストタロツサ家には庭園への直通の転送ポートが設置されなのはやフェイト達に魔法を教える際は庭園へと場所を移し行っている

その庭にてなのはがフェイト達相手に誘導弾を動かしている  
それ自体は問題ない  
問題なのはその軌道である

「えーい！逃げちゃ駄目なのー！！」

「もうやだよー！助けて姉さん！フェリシア！！」

「ちよっ！フェイト姉！こっち来ないでっば！」

「フェイトが無理なのに私ができる訳ないよー！助けてー！！」

まだ学校にも上がっていない魔法に目覚めて一年の少女が経験者であるフェイト達を追い回すように誘導弾をこなしているのだ

「誘導弾をうまく操作するには空間認識能力の高さが必要だけど……」

「なのはさんの空間認識能力はレアスキル並の高さです。高機動型のフェイトとフェリシア相手に一方的に追い詰めるなんて……」

リニスがそうつぶやく  
すると隣にいたアルフが手を上げた

「その何が問題なんだいプレシア？」

「高過ぎるのも問題になるのよアルフ。自分の体感している空間と実際の空間にズレが生じるくらいにね。だから普段の生活で何もないところでこけたりするのよ」

プレシアがため息をつく

「とりあえず基礎身体能力もあげていくしかないわね。となると士郎さん達のほうが適任ね」

「そういえばプレシア。士郎さんがアリシアを弟子入りさせたいと  
いってましたが？」

「はっ？」

リニスの言葉に思わず手にしたコップを落とす

それをアルフがダイビングキャッチし割れずにすんだがスルー

「フェイトやフェリシアに比べると魔力が低い分そつちに才能が  
あったんでしょうかね？」

「アリシア本人がやりたがってるなら……身を護る術は多いほうが  
いいわ」

「同感です。どうも近所に結界が張られていてその家に監視用のサ  
ーチャーが幾つかありましたから管理局にマークされてると見てい  
いでしょっ」

そういつてリニスが映し出した映像にはある家が映る

「確か八神という家だったわね」

「はい。ご丁寧に入払いの結界まで張られてました」

「キナ臭いねえ」

アルフの言葉に二人は同意する

「「「もうイヤー!!」「」」

「逃げてばかりじゃだめなのー!」

そんな三人をよそにフェイト達は割りと本気でなのはの誘導弾から逃げ回っていた

## 第七話 才能（後書き）

ルファイト「以上なのはの才能でした」

なずな「空間認識能力の高さ……NTか？」

なたね「なずな兄様、それは上手い事言っただつもりでしょうか？」

フェイト「こ、怖かったよお」

アリシア「誘導弾怖い誘導弾怖い誘導弾怖い誘導弾怖い誘導弾怖い  
誘導弾怖い誘導弾怖い誘導弾怖い誘導弾怖い誘導弾怖い  
誘導弾怖い誘導弾怖い誘導弾怖い誘導弾怖い誘導弾怖い  
誘導弾怖い誘導弾怖い誘導弾怖い誘導弾怖い誘導弾怖い」

ルファイト「ぬおっ！アリシアがブラックアリシアになりつつある  
！？」

フェイト「姉さーん！帰ってきてー！ー！ー！！」

フェリシア「……………」

ルファイト「フェリシアどうしたんだ？」

フェリシア「……ちゃった」

フェイト「えっ？」

フェリシア「少しだけ……怖くて……おs」

ルファイト「以上！次回また会いましょう！……！！……！！……！！」

閑話 なたね（前書き）

高町なたねの根底である設定が判明します  
因みに別に伏線でもありません……多分

## 閑話 なたね

これはプレシアがなのは達に魔法を教えて1ヶ月ほどたった時のお話である

高町家の縁側で正座をしお茶を飲む少女がいる  
高町なたね

彼女の首の紫色の宝玉がついた首飾りが太陽の光を受けてキラツと輝く

「……………こうしていると変わらないのですね」

その彼女の膝を枕に昼寝をする水色の髪の少女

「フェリシア……………それが”今”の彼女の名前ですか」

「その言い方だとまるでフェリシアのことを知っているみたいなのよね」

お茶請けに煎餅を持ってきたプレシアが隣に座る

「あなた……………もしかして私と同じなのかしら？」

「……………私はあの時消えるはずでした。しかし気づけばこの体で私のオリジナルの妹となっていたのは今でも思い出すと衝撃的です」

フェリシアの頭を撫でるなたね

「私は以前の生では”理のマテリアル”と呼ばれる”闇の書のマテリアル”が一基”星光の殲滅者”と名乗っていました……」

「この子も？」

「記憶こそありませんがこの外見はまるっきり私が知る彼女”力のマテリアル””雷刃の襲撃者”そのものです。ですが……そのような事どうでもいい」

寝返りをうつたフェリシア

ちようどなたねのお腹に顔を向ける形になる

「私も彼女、いえフェリシアも幸せなのです。私達も闇の書という存在に縛られ心の奥底ではその宿命から解き放たれる事を望んでいた……いまだ見ぬ王もきつとどこかにいて幸せに暮らしている。私はそう信じています」

なたねが煎餅を口に運びパリッと音を立てる

「そうね……だからこそ私達は守らなければいけない。管理局はきつと彼女達を見つけたら引き込もうとする。それがなくても強い力はそれだけで危険を呼び寄せてしまうのだから」

「ええ。手の届く限り私はこの暖かい幸せを護ります……たとえルシフェリオンが使えなくても」

紫色の宝玉に触れるなたね

「デバイス？ちょっと貸してもらえるかしら」

「?どつぞ」

なたねから受け取るとプレシアは意識を集中する  
すると淡く宝玉が光りいくつもの文字が流れ光が収まった

「……はい完了よ。どうやら自閉モードになって高くなったあなたの魔力を制御していたみたいね。もう大丈夫そうだから解除したわ」

「……えっ?」

受け取ったなたねの手の宝玉が輝く

《マスター。ようやくまたあなたと共に在れる日が訪れました》

「ルシフェリオン……」

《今のあなたの魔力によりやく慣れたのですが自閉モードが解除できずご迷惑をおかけしました》

チカチカと輝くルシフェリオンを再び首にかける

「ルシフェリオン……また一緒に戦ってくれますか?」

《マスターの命ずるままに》

新たな主従をプレシアは穏やかな瞳で見つめていた

閑話　なたね（後書き）

ルファイト「はい閑話でした」

なたね「私のことでしたか」

ルファイト「うん。なたねだけはB o Aの世界で消滅した後の転生なんです」

なたね「ルシフェリオンまであったのは？」

ルファイト「ゲームネタバレだから詳しく言わないけどゲームストーリーでは倒した人物が消えていく。その時持つてるデバイスも消えてくから普通にありかな？と思ったからね」

なたね「なるほど」

ルファイト「では次回！」

なたね「わふー」

## 第八話 私立聖祥大学付属小学校（前書き）

時間が飛びます

私立聖祥大学付属小学校の制服に関してはツツコミなしですよ

## 第八話 私立聖祥大学付属小学校

場所は高町家リビング

プレシアは改めて信じてもない神に感謝していた

「よく似合ってるわよアリシア、フェイト、フェリシア」

「えへへ」

「ほ、本当母さん？」

「ほ、僕は可愛いよりカッコいいほうがいいんだけど……」

プクッと頬を膨らませるフェリシア

その頬をつつくアリシア

褒められて笑っているフェイト

今プレシアの三人娘は私立聖祥大学付属小学校の制服を着ていた

「でも我慢しないとみんな一緒の学校にいけないんだよ。フェリシアはそれでもいいの？」

「そんなの嫌だ！」

「だったら我慢だよフェリシア」

そう言ってアリシアがフェリシアの頭を撫でる

「母さん……なのは達は？」

「ふふっ……フェイト、後ろよ」

フェイトが振り返るとそこには同じように私立聖祥大学付属小学校の制服を着込んだなのは、なたねの姿

「ああもう可愛いわなのは！なたね！」

ガバツとカメラを投げ捨て抱きつき頬ずりする桃子  
投げ出されたカメラは美由希がキャッチし事なきを得る

「にゃあああ！お、お母さん苦しいよお！」

「……きゅっ」

あまりにも激しい頬ずりの為かなたねは目を回していた

「やっぱりこうなった……」

呆れ半分で入ってきたなずなも私立聖祥大学付属小学校の制服だが  
半ズボンではなく長いズボンである

「あれ？なずな半ズボンじゃないんだ？」

「俺に半ズボンなんて似合わないよ姉さん」

「それは確かに……俺もそう思うぞ」

美由希の疑問に答えたなずな  
恭也もそれに同意する

「しかしもうなのは達も小学生か……早いものだな」

様子を見守っていた土郎の咳きは誰にも聞こえない

(プレシアさんの言っていた管理局とやらはまで来てはいないが…  
…)

目の前では桃子から逃れたなのはがなずに正面から飛びつきなたねが左から、フェイトが右から、アリシアは背中に、フェリシアはアリシアごと覆いかぶさるように飛びついている

(できるならこの子達がこうやってずっと笑っていられるように何もおこらなければいいんだがな)

そんな土郎の思いは叶う事はなかった

第八話 私立聖祥大学付属小学校（後書き）

ルファイト「ようやく入学しました」

桃子「地味にここまで来るのにかかったわねー」

ルファイト「次はアリすずのイベント予定ですよ」

桃子「そうなのー……ところでルファイトさん」

ルファイト「はい？」

桃子「私が高んだか娘溺愛しすぎのお馬鹿さんに見えるんですけど？」

ルファイト「……気のせいですよ」

桃子「……デイベイン」

ルファイト「ちょ！それはまだ構想中で使うか分からない設定の桃子さん専用デバイス”深愛の心”ラヴィッシュユハート!？」

桃子「バスターー」

ルファイト「ぎゃあああああー！」

第九話 誘拐（前書き）

細かい事は気にしすぎたら負けなのです

## 第九話 誘拐

なのは達の入学から半年が過ぎた

翠屋にはおなじみの高町兄妹、テストロツサ姉妹

そして入学して程なく親友となった金髪緑眼の少女　アリサ・バ

ニンクス

紫髪に薄紫の瞳の少女　月村すずかが窓際の席を使いおやつを食べていた

因みにならずとなたねは手伝い中の休憩で翠屋エプロンを着ている

「しっかし魔法ねえ……」

フェリシアを見るアリサの瞳はどこか冷めている

「な、なんだよあ！僕は悪くなんかないぞ……！」

「いやあれはフェリシアが悪いよ……」

フェイトにツッコミを貰う

ぐぬぬ、とどこぞの修羅みたいになるフェリシア

「まさかいきなりフォトンランサーを撃つなんて思わなかったよ」

「まあフェリシアらしいといえましょうが」

アリシアとなたねがカフェオレを飲みながらその時の事を思い出したため息をつく

入学して二週間ぐらいたった日中庭にてお昼を食べていたテストロツサ姉妹に高町兄妹はアリサが手に持つヘアバンドをすずかが必死

に取り返そうとしている場面を目撃

それを見たなのはがアリサにお話する 前にフェリシアがフォト  
ンランサー系射撃魔法電刃衝を放ちアリサを痺れさせたのだ  
魔法のことが当然バレアリサとすずかの家族も交え魔法の事を話す  
事になった

因みにフェリシアはこの時プレシアに尻叩きの刑に処されフェイト  
からしばらく離れなかった

「えへへ」

「フェリシアちゃん、全く褒めてないの……」

何を勘違いしたのか照れるフェリシアになのはが思わずぼやいていた

「ねえなのはちゃん」

珍しく身を乗り出す勢いですずかが尋ねる

「なのはちゃん達が使う魔法って私達も使えるのかな？」

「あつ、それはあたしも気になるわね」

アリサも目を光らせなのはに問いかける

「え、えーと……」

「俺達じゃなんとも言えないよ二人とも。プレシアさんなら分かる  
んじゃないかな？」

困るなのはを見かねたなずながフェイトらに聞く

「母さんなら分かると思うけど……今いないみたい」

店の中を見回してみたフェイト

そのほつぺたにクリームがついているが誰も指摘しない辺り確信犯である

「そっか……それじゃなのは魔法を私達に見せなさいよ！」

「それくらいなら……でもここじゃ見せれないから公園に行こう」

「決まりね！それじゃ早速行くわよ！」

アリスを先頭にすすかとなのは、アリスにフェイトとフェリシアがついていく

それを見届けたなずなとなたねは席に残されたカップを下げ厨房の皿洗いをしようと奥に入ろうとした瞬間だった

「な、なずな……！！！」

翠屋のドアを勢いよく開けて入ってきたのはフェリシアだった

「フェリシア、なに泣いてるのです？」

涙目で今にも大泣きしそうなフェリシアに気づいたなたねが傍に駆け寄り撫でる

「戻ったわ桃子……フェリシアどうしたのかしら？」

買い物より帰ってきたプレシアがフェリシアに気づきななたねからフ

エリシアを預かる

「ぐっす……ひっく……」

「フェリシア、私は怒らないわ。だから何があったのかお母さんに教えて」

優しくされど大魔導師としての瞳を見せるプレシアにフェリシアは涙をぬぐいながら答えた

その答えはプレシアのみならず翠屋にいた者達を揺るがした

「皆が……皆が黒い車に乗せられて連れてかれちゃったんだ!」

## 第九話 誘拐（後書き）

ルフアイト（めんどいから以降Rで）「いきなりな十一話でした」

なのは「いきなりすぎるの……」

R「だが私は謝らない」

フエイト「一つ疑問なんだけど……なたねとなずなっって小学生なのに働かせてるの？」

R「あくまでお手伝いです。はじめてのお使いみたいな感覚ですの」

????「キモッ！」

R「まだ出番のないあなたはUターン」

フェリシア「それじゃあまた次回！」

第十話 幼き阿修羅 前編（前書き）

無双は次回

今更ですが今回から

「」は通常会話

『』は通信

【】は念話

《》はデバイス音声

になります

第十話 幼き阿修羅 前編

フェリシアの告げた内容を聞いたなたねはまずアイコンタクトを土郎と恭也に送る

同時に美由紀と桃子は月村家とバニングス家に連絡

すぐにフェリシアの言う黒い車を探し始めた

なたねは窓際に立っていたが気づかれぬように立ち去っていた

「ぐすつ……」

「大丈夫よフェリシア」

泣きぐずるフェリシアを抱きしめ安心させようとするプレシア

「……なたね、なたねはどこに行ったのかしら？」

「さっきまで窓際にいたのですが一体どこへ……まさか!？」

慌てて着替え室に向かうなたね

なたねのロッカーを開けたなたねは事態の深刻さが増したことを悟らざる得なかった

「なたね?」「プレシア、なたねの刃引きした練習用の小太刀がありません……」

青ざめた顔を向けるなたね

「に、兄様を……と……止めないと……」

僅かに震えながらプレシアに告げる

「犯人は……生きて帰れなくなります」

携帯を手に取りプレシアは土郎らに連絡しながらマルチタスクを使いリニス、フェイトと使い魔のリンクを持つアルフへと念話を送った

海鳴市 街中

街中を走り回っていたリニスとアルフ

アルフは人型になり耳と尻尾を当然隠している

「アルフ、フェイトとのリンクは？」

「だめだよりニス。なんか妨害されてるみたいで繋がらないよ！」

それを聞いたリニスは眉をしかめる

（使い魔のリンクによる念話も通じない……魔導師がからんでいるのでしょうか）

その時リニスに念話が届く

【リニス】

【プレシアなにかありましたか？】

【最悪の事態よ。なずながいなくなっただわ。恐らくあの子あの”レ



第十話 幼き阿修羅 前編（後書き）

R「土郎さんとプレシアさんがさりげなく交通法違反したけどなんともないぜ」

閻璃「よいのかそれは？」

はやて「いやあかんやろ」

R「いいのいいの。美沙斗さんや土郎さんの現役時代のコネで何とかなるから」

あんり（漢字かひらがなにするか迷ってる）「ふん、塵芥が生意気にも権力を振りかざすとは」

はやて「あんりあかんよ。人様にそないなこというたら自分に返ってくるんやで」

あんり（因みに決まらないと本編に八神家ごと絡んでこない可能性大）「……すまぬ姉上」

はやて「素直な子はおねえちゃん好きやで」

R「では次回」

第十一話 幼き阿修羅 中編(前書き)

間が空いてしまいました。投稿ですが  
しかし正直びみょん……

第十一話 幼き阿修羅 中編

プレシアと士郎が爆走している頃それは起こっていた

町外れの廃墟ビル

薄暗い部屋の中縛られたアリサとすすか、アリシアが身を寄せ合っていた

「なのはちゃん達大丈夫かな……」

「大丈夫！フェイトと一緒にだもの！」

そう言いながらもアリシアは現状を打破する方法を考えていた

（とは言ったけど絶対お母さん絡みで管理局の人いるっぽかったし……私達よりもフェイト達が危ないかも）

辺りを見回したアリシア

ふと罅割れたパイプを見つける

「……これしかないかな」

「アリシアちゃん？」

立ち上がりパイプの前に立つ

それに気づいたすすかが声をかける

「ちえいさー！」

小柄な体を力いっぱい回し放った回し蹴りがパイプに当たる

「痛ーーーーっ！！」

悶絶し転がるアリシア

しかしその甲斐あってかパイプは上手い具合に折れ曲がり尖りができていた

「うつつ……フェイトみたいにデバイス無しでも簡単な魔法はできるようにしよう」

立ち上がったアリシアは縛られてる手のロープを尖った部分に当てる

「すずか、ちょっと手が切れないように見てて」

「あ、アリシアちゃん……」

「私はフェイトとフェリシアのお姉ちゃんなんだから少し無茶しても守らなきゃ」

アリシアの姉としての意地が彼女を突き動かしていた

一方アリシア達と隔離されたのはとフェイトの二人

「フェイトちゃん……」

「大丈夫だよ」

幸いにもフェイトのポケットに入っていたバルディッシュまでは盗られなかった

しかしフェイトは周りを見て気づいた

(監視されてる……)

僅かにレンズに当たった光の反射を見つけたフェイトは魔法を使おうにも使えないジレンマを抱えていた

(でも変だ……アルフへの使い魔リンクを使った念話もブロックされてる……)

とここでフェイトはある仮定を思いついてしまう

(まさか……私となのはが本当の目標だったの？アリサやすずかは巻き込まれただけ？)

顎に手を当てて考え込むフェイト

その時ドアが開く

音に気づきフェイトがそちらを見ると地球に来る前に父の葬式で見かけた管理局の制服を着た男性が立っていた

「まったく……色々と手間かけさせやがって」

ガリガリと頭をかく男性

その男と視線を合わせたフェイトはなのはの元に戻り庇うように立つ

「原作無視もいいところだろうが……ま、おかげで良い様にやらせてもらえそうだな」

ポケットに入ってるバルディッシュに手をかけた瞬間だった

「おっと」

「バインド！？やっぱりあなたは！！」

全身にバインドをかけられたフェイトは床に転がりながらも睨み返す

「ああ、管理局員さ。人材不足の管理局は魔力素質のある人材を管理外世界からもちょうやって発掘するんだよ。テストロッサのお嬢さん？」

「っ！！」

自身の素性を知られている事に驚くフェイト

「どうしてこんな事するんですか！フェイトちゃんを離してください！」

男性に向かってなのはが叫ぶ

しかし男はつかつかとなのはに歩み寄る

「お前は状況分かってんのかあ」

「えっ……きゃうー！」

パシン！と男はなのはの頬をはたく

倒れたなのはに舌なめずりしながら近づいていく

「へへっ……なのちゃんを俺色に染め上げてやる」

「ひっ！」

「なのは逃げてえ！」

なのはにじり寄る男は下衆な笑みを浮かべていた

第十一話 幼き阿修羅 中編（後書き）

R「というわけで中編です。今日のゲストは聖星と因果、通称リメイク版よりこのお方」

サリス「サリス・カイザードよ」

R「サイトを開くきっかけとなった我が恩師より使用許可をいただいた恩師のオリキャラでございます」

サリス「ねえ」

R「はい？」

サリス「この話で幼き阿修羅終わるんじゃないの？」

R「……だって時間ないんだもん！」

サリス「いやその言い方は気持ち悪いから……」

R「いいよねえ。サリスはヒョウガとおん」

サリス「ライトカイザー！シャインレイヴ！！」

R「みぎゃあーーーーー！！！」

サリス「さて次回の更新で会おうね！ゲストは同小説チート代表格のヒョウガ・ルナリーフを予定だよ」



第十二話 幼き阿修羅 後編（前書き）

ようやく完成しました

戦闘描写が難しい……

今回は戦闘とはいえないとは思いますがね……

今回はとあるツクルのゲームよりゲストが登場します



「ひっ！やだやだ！来ないですよー！！」

バインドをされているため虫のようにしか動けないのはを男は遊  
びながら追い詰める

「なのは！（このバインド構成が無茶苦茶だ……バルディッシュ急  
いでー）」

《やっています！しかし後二分は》

『急いで！なのはが危ないのー！！』

見れば男がなのはの足を捕まえている

「捕まえたぜ！なのちゃん」

「やだやだ！離してよー！！」

暴れるなのはの足が男を蹴るが微動だにせずそのままなのはに覆い  
かぶさるように動く

「へへっ……」

「やだ…助けて……助けて……なすなくうううん！！」

その声と同時だった

ガコン

部屋の扉が斬り裂かれずり落ちる

その向こう側に立っていたのは小太刀を逆手に握ったなずな

「……………」

だが一つ異常なものがあつた

なずなの手に握られた小太刀が血に濡れていたことである

「あんだ手前え」

なのはに覆いかぶさっていた男は杖を手になずなを見る

「俺以外のオリ主はいらねえんだよ……………んっ？」

何かを考え込む男

「そっか……………手前えが原作ブレイクしたんだな！だったらここで殺して俺が好き勝手にしてやるよ！」

男の持つ杖にフェイトは見慣れた魔法陣が浮かぶのを見た

「なずな！逃げて！！」

「ヒヤッハ……………！死にさせ……………！！」

フェイトの警告と同時に放たれた砲撃魔法

迫り来るそれをみたなずなは左足を前に出しながらそれを軸に上半身を右に捻る

同時に小太刀が輝きを帯びる

「疾っ!!」

踵から腰へ上半身へと力を込め振りぬくのは右手に握る小太刀  
その輝きを帯びた刃は 砲撃を斬り裂いた

それだけに留まらずなずなの瞳が見開かれる

もしこの場に士郎がいればそれがどういう事であるか気づいただろう

「はっ？」

男が言葉を発した瞬間なずながその背後に立ち半ばまで折れた小太刀を鞘に納める

「げふうふうふうっ!？」

同時に男は倒れ左肩から斜めに裂傷が走る

「なずな君……」

「なずな……」

なのはとフェイトがなずなを見る

なずなは何も言わず二人のバインドを小太刀を抜き斬る

「なのはー!フェイトー!」

「なのは!フェイト!大丈夫なの!!」

「なのはちゃん!フェイトちゃん!」

アリシアを先頭にアリサとすずかが部屋へと入ってくる

「アリシアちゃん！アリサちゃん！すずかちゃん！」

「なずなが助けてくれたんだ……」

再会した五人

アリサはなずなを見ながら問いかける

「なずな……もしかしてあんたが外にいるの全部」

「ああ……」

そう言っただけは黙り込み入り口に行く

（本当は泣きたいくせに……無理するんだから）

その背中をアリサは士郎とプレシアが来るまでずっと見つめていた

町外れの廃墟ビル 屋上

男は傷を押さえながら歩いていた

「ちきしょう……殺す……あいつ……絶対殺してやる……」

折れた杖      デバイスを抱えながら転移魔法を使おうとしたその時  
だった

「はい ようこそ」

目の前に長く黒い髪を風に靡かせた青を基調としたロングスカートを着た女性

「そしてさようなら」

チュン

どさりと倒れる男

その額には風穴が開いており何が起きたか全く分かっていない表情をしていた

「脳漿フツ飛ばしてもよかつたんだけどねー」

女性の手には円筒状のものが着けられた黒光りする拳銃

「まっ、ただのお節介だし子供に見られたらまずいしね……そうでしょノエル・K・エアリヒカイトさん」

銃をホルスターに納めた女性が後ろを振り返るとそこには月村家のメイド長ノエルの姿があった

「相変わらずでたらめな身体能力ね……さすがは月村の技術力」

「これ以上の介入をなさるなら容赦はしません……緑川聖奈様」

女性　　緑川聖奈はやれやれと呆れたようにため息をつく

「別に居合わせたのは偶然だしそう睨まなくても帰るわよ……あいっつらじゃないみただしね」

そう告げて聖奈は気配を消し風景に溶け込むように去っていく

「……………さてこれから忙しくなりますね」

死体となった男を肩に担ぎノエルは屋上か土郎らに見つからぬように飛び降り去っていった

## 第十二話 幼き阿修羅 後編（後書き）

R「ようやく幼き修羅が終わった」

聖奈「そうね。というわけでゲストは私、緑川聖奈でした」

ヒョウガ「あとがき限定ゲストのヒョウガ・ルナリーフだ」

R「しかし難産だった（時間的な意味も含む）」

聖奈「というか私普通に銃刀法違反してるんですけど?」

R「それはあなたが5の設定でペロニカ編行く前に偶然寄っただけで彼らがあの子の関係者だと思ってきたら外れ。でも見捨てるのは胸糞悪いから助けただけです」

聖奈「銃刀法違反は?」

R「まああなたの町は壊滅してますしバレなきゃいいや、的な感覚で使ってる設定です」

ヒョウガ「因みに彼女の使った拳銃はPPFサイレンサー付きだ」

R「何のツクール作品か分かった人は感想にでも書いてくれれば答えあわせしますよ」

聖奈「ではまた次回遭いましょう!」

R「字が違う!?!」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5323/>

---

魔法少女リリカルなのは ~大魔導師の望む未来~

2010年10月28日21時20分発行